

座長のまとめ

シンポジウム I

Radioassay の現状と問題点

入江 実 (東邦大学第一内科)
斎藤 史郎 (徳島大学第一内科)

本年の第25回日本核医学会総会では、河村文夫会長により4つのシンポジウムが企画され、その1つである上記についてわれわれ両名が内容の企画にあずかり、司会に当たらせていただいた。本シンポジウムの開始に先立って、入江がシンポジウムの目的とその大体の内容を述べた後、初めの2題を入江、あとの3題を斎藤の司会により、5名の演者の講演が行われた。徳島大・第一内科の斎藤晴比古先生は、「ラジオイムノアッセイ(RIA)の進歩と問題点」と題して、RIAの過去約30年にわたる進歩の概略を紹介したのち、同氏がとくに興味をもって研究されている視床下部ホルモン、心房性ナトリウム利尿ホルモンなどの小分子ペプチドホルモンのRIAを例として、種々の問題点と解決法などを報告された。次に東京女子医大・内分泌センター内科の対馬敏夫先生は、「リセプターアッセイの基礎と応用」というテーマで、はじめに解説的に概論を述べ、さらに同氏のグループの豊富なデータを示しながら、ラジオリセプターアッセイ(RRA)の方法論的な問題点と、現在ならびに将来における応用について述べられた。京大・核医学科の小西淳二先生は、「ラジオリセプターアッセイによるリセプター抗体の測定」と題して、近年各種の疾患で病因論的に重要な問題とされているリセプター抗体の測定とその臨床的意義について、バセドウ病におけるTSH結合阻害抗体(TBII)を中心に詳細なデータを示された。阪大・臨床検査診断学の遠藤雄一先生は、「Radioimmunoassay

と Nonisotopic Immunoassay の比較」というテーマのもとに、最近増加しつつある Enzyme Immunoassay (EIA)を中心とする non RIAについて、RIAと対比しながら測定上の問題点、応用などにつき、それぞれの特徴を中心述べられた。最後に東邦大・第一内科の宮地幸隆先生は、「Radioassay のデータ処理と精度管理」というテーマで、正確な測定値を得るために必要なデータ処理法と、内部および外部精度管理法について、現在用いられている方法とマイコンを利用した比較的簡便な方法を紹介された。また、日本アイソトープ協会インビトロ委員会が中心となって行っているコントロールサーバイと、その結果判明してきた RIA キットの問題点などについても言及された。

以上の5氏の講演が終了したのち、司会者と演者を中心としておのおのの演題について活発な討議が行われた。これらの5つの演題はすべて現在の Radioassay にかかる重要なトピックであり、また、各演者がその領域の第一人者であることから、先端的でかなり高度な議論がかわされた。その内容は聴衆の方々にとってもきわめて有意義なものであり、今後の Radioassay の発展に寄与するものが大きいと考えられる。最後に斎藤が本シンポジウムの内容と意義についてまとめを行い終了したが、われわれ一同は、まことに時宜をえた本シンポジウムを企画された河村文夫会長に敬意と謝意を表するものである。